

校友・同窓が語る

同志社 100 周年への展望 (4)

—名古屋編—

(1971. 10. 20)

出席者 (発言順)

松井 徳三 (校友会名古屋支部長
東邦肥料常務、校友)

林 一郎 (名鉄百貨店常務、校友)

秦 孝治郎 (同志社理事長)

丹羽 吉輔 (丹羽幸國社長、校友)

前田 輝雄 (大同製鋼参与、校友)

安田 幸雄 (安田印刷所社長、校友)

坂田 三郎 (毎日新聞「住まいの
相談所」所長、校友)

平野 耕治 (東邦コープス販売働勤務、校友)

司 会

大江 直吉 (前同志社本部庶務部長)

大江 きょうは名古屋地区で座談会を開かせていただくわけでございます。日ごろ同志社についていろいろご意見なりご感想なりをお持ちだと思しますので、そういう点について忌憚なくご意見を聞かしていただき、また立派な百周年を迎えられるようお願いいたします。

最初にご教育の問題についてお話を伺いたいと思っておりますが、同志社の学生生活を振り返っていただいて、何か心の底に残っているものがあると思うんです。そういうものが一つの同志社の教育の特性じゃないだろう

か、そういう意味で学生生活のことから現在に至るまで、同志社教育についてのご意見なり感想なりをお伺いしたいと思います。支部長の松井さんから逐次お話しいただけたら結構だと思います。

松井 いま大江さんからお話ございましたが、私、同志社へ行くにつしましては、私の社内報にもいろいろ書いたことがございますけれども、自分から同志社を志望したわけではなくて、実は名古屋高商、いまの名大経済学部になっておりますけれども、そこへ入学が決まっておったんですが、たまたまここ



松井徳三氏

の東邦瓦斯の社長、当時の支配人だったので、二代目の社長になられた都留信郎さん、これは都留重人さんのお父さんに当たる方ですけれども、その方が私を呼んで同志社へ行かんか、同志社という学校はキリスト教主義の教育をしておるけれども、別にそれを強制するわけじゃない。とにかくいっぺん見てきたらどうだ。こういう勧め方をされまして、行ったわけです。それで、当時の今出川キャンパスですか、非常にゆったりした校庭に芝、クローバーがいっぱい生えてる、それから非常に重厚な感じのする明治時代の建物がたくさん建っておって、非常に名古屋では味わえないふんいきを持った学校だということで、非常に感銘してきたわけです。それで都留さんに、それでは私、行かしていただき



前田輝雄氏

ますということ、入試を受け、はいってきただけですが、もちろん、それには野球という一つの目的もあったわけです。野球の選手を、当時（昭和三年）同志社が全国から新人を集めて、野球部を強くしようということで集められた中の、一人なんです、それで同志社へはいりましていろいろ教育を受けておりました。

同志社に行って初めて感じたことは、当時非常に生徒数も少なくて、いまのように二万もおるといふようなことではないので、すぐ仲よくなる。当時はまた、中学からはいつてきた本当の同志社の精神を受継いだ学生と、それから早稲田なり慶応なり、あるいは国立の大学を落ちて、それで同志社へはいってきただけで、二種類あったと思うんです。それ



秦孝治郎氏

で一緒に同じ教室で勉強しておりまして、やはり同志社中学からはいってきた人は、何かほかの学校からはいってきた者と違う一つのふんいきというものを持っておられて、それが同志社の教育なんだということを感じたわけです。ただ、キリスト教主義の教育というものは、はいったときはもちろんわかりません。それで金曜日——いまは水曜日ですけど、いつでも——第四時間目にチャペルでいろいろ新島先生のお話を聞いたり、キリスト教の話の聞いたりして、そういうことが知らず知らずに同志社の学生らしい教育を受けたということになるんじゃないかと考えるわけですが、それが、大学へはいりましてからは（私、経済学部なんですが）全然キリスト教主義の教育というものは影をひそめて、も



林 一 郎 氏

っぱらそれぞれの専門の先生が専門に教えてくれる。卒業しましてから、私、からだをこわして一年間会社へはいるのが遅れて、九年に卒業して十年に瓦斯会社へはいったんですが、一年間自分がからだをこわした間に、自分がいままで野球を一生懸命やってきたことに對する反省といえますか、からだだけを使っておって精神の方はさっぱり進まなかったということとを反省しまして、ある程度勉強せにやいかんということを考え、もういっぺん勉強し直すつもりで、一年間いろんな本を読んだわけです。人間は必ずいっぺんは死ぬんだ。死ぬときには悔いのないような生活を送ってから死にたい。そういうことを痛切にそのとき感じたわけです。それで、そのためにはいっただいどういことをしたらいいんだろ



丹 羽 吉 輔 氏

うといろいろ考えたわけです。病院で考えた療養所で考えたわけですけれども、これは住谷先生もそう言ってるじゃないんです、人のために人のいやがることを率先してやっていく、これがやはり同志社の本当の、いわゆる教育の本旨じゃないだろうかということを考えついて、瓦斯会社へはいりましてからでもそういうことを根本に置いて、いままですと過ごしてきたわけです。そのためかどうか知りませんが、割に、若い人たちは慕ってくれますし、その人たちの教育するときに、やはりそういうことを言っているわけです。

私、人事部長をやりましたのは昭和三十五年でございましたんで、まあ、かなり私立大学がマスプロの教育にはいったあとでござい



安 田 幸 雄 氏

ますので、非常にそれぞれの各私立大学の持つておる特質というものをなくした学生が来る。これは私、名古屋タイムスという新聞にも書いたことがありますけれども、私立大学の特徴というのは、やはり、話をしてると、これは早稲田の卒業生だ、あるいは慶応の卒業生だということがわからなくて、私立大学の特徴がなくなってしまう。背広を着ていても、ちょっと話していると慶応の学生だなどということがわかるような、そういう、やはり昔はそういう教育をしておられたんじゃないか。同志社ももちろんそういう教育をしていった。そういうことを痛切に感じたわけでした。たまたま一次試験に残った中に同志社の経済学部が学生がおったんですが、それに質問をしたわけですけれども、君は同志社で教



坂田三郎氏

育を受けたんだが、何が一番印象に残ってるかということ、はっきりいってんこで言ったらどうかと、面接のときに言ったんですけれども「さあ」と言うだけで何も答えがなかったわけです。住谷先生もよくおっしゃってますが、総長の住谷先生の名前も知らなければ、顔ももちろん知らん学生も多い。それから、新島先生なんてそんな先生聞いたことないといった学生があるんだということ言っておられましたけれども、そういうことが現在の学生運動そのものに、ずっとつながっていったるんじゃないかという気がするんです。



平野耕治氏

を強制して教育をしたところが、学生の方で受けなければ何にもならない。そうするとやっぱり、先生が人格的な触れ合いで、自分がキリスト教主義教育を受けた人間で、同志社のキリスト教主義の教育を受ければこういう人間になるんだという、一つの見本、たいへん失礼な言葉ですけども、そういうものが如実に現実にあつて、そしてみんなが、なるほどということでききずられていく。そして本当の、いわゆる同志社の教育を受けた人間になっていく。それが一番好ましいと思うんです。



大江直吉氏

けた。人のために人のいやがることを率先してやるんだということを、知らず知らずのうちに植付けられた。そういう点で私は非常にいい同志社の教育を受けた。もし孫がどこかの学校へ行きたいと言ったら同志社へ行け（笑）ということ、いまでも言える、そういう気持を私は持っております。

大江 ありがとうございます。いいお話を伺いましたが、林さん、ひとつ……。

林 実際問題としては学校がどう動いてるのか、どう変わったか、ほとんど知らないというのが、恥かしながら卒直な私の気持で、こういう機会を与えられて、母校はどうなってるんだらうということを改めて考えている次第です。といって、私、十八年卒業して以来、焼け出された戦後の家にも卒業当時のペ

ナントにE・S・Sと空手部のバッジをつけ部屋に飾っているという中に終始しているわけですが、いまま支部長のお話がありましたように、私自身も五年間の教育の中で、いま振返ってみますと、キリスト教教育がどうということじゃなくて、むしろ、やはり新島先生がアメリカにお出でになり、世界的な視野で、しかも欧米がキリスト教という一つの道義の上に日常生活が成立しているということ、そのすばらしさというものをわれわれに教えられた。倫理なり道徳観なり、日常の社会規範というものの教育が、その根底にあったんじゃないかということ、最近になって、私、欧米を見てから、つくづくその必要性を感じておるわけでありますが、しかしながら、実際に現在、学生、われわれにしても、そういった問題が果たして身についてるか。卒業した者が何となく、社内でも二、三十人、オール名鉄でいえば六十人ばかりおりますので、時々同志社会をやっておりますが、良心を手腕に運用しうんぬんということは口にしても、それ以上のかちかちもいなければ、がりがりもない。いまお話しのように学校のカラー、特徴をどこまで彼らが実際に実践し身に

つけ、また誇りに思っているかについては、いささか寂しい気がする。そうした意味からも、特に新島先生がああした禁を犯しながら、あれだけのバイタリティと理念をもってお帰りになった。本当にいま一番ないのはバイタリティじゃないか。おれは同志社を出たんだということを敢然と胸を張って言える仲間が非常に少ない。小さな個人としては立派に成長しても、社会人としては何かずぶとさ、あるいは自信という点で、何だかまだ寂しいような感じがいたします。戦後会社へはいりましてから二十五年から八年まで、慶応の旧制大学院の方にはいりまして、経営学をずっと継続してやったわけですが、まあ、カラーは非常によく似てる。しかし、社会へ出ていろんな行動を起こした場合に、塾生の一面としての私と、同志社人としての一面の私とが、いろいろな接触の中に非常に大きな違いを見出し出した。もちろん、非常に素直な純粋な同志社人のよさという一面もありましたが、何かもう一つ強いバックボーンと申しますか、そういったものが、わかつちやおるんだけれども実行できない弱さを感じてきておるわけです。そういった面から結局自分自身

を振り返っても、たとえば、後輩のお訪ねをいただいても、もう一つ自分を殺して自分の努力で後輩の面倒みるだけのベストを尽くしたかということを、私はよく反省している。そういった点は言葉で言えないんですが、何か弱さがある。新入生の歓迎会で、お前たちは各校の特徴を知ってるだろう。一つ見習ってほしいのは、われわれ身近で知っている京大生とか早稲田生の持つてゐる一面のずさなどは受入れ、プラス・アルファして幅広くいけ(笑)。しかし本心は失うな。こういう話を先輩ぶってするわけですが、それがよきにつけ悪しきにつけ、皆さん紳士的にやっておりますが、その点、私は同志社生活を顧みて教育の中で勇氣を持って実行する、何か一つ欠けるものがあるような気がしております。大勢の先輩あるいは卒業生の中には、決してそうじゃない人々も多いと思いますが、学校別にいまのような立場でみるときに、そうした点で若干私は寂しく思っております。そうしたものが何かの機会に強く誇りを持てるように、母校自身がこの百年を機会に反省し、あるいは、何かそういったきっかけに、おれは同志社人だ、と言えるような空気ができたら

みんながそれを機会に、もっと横との連携もこそそしないといけないんじゃないかという感じが、日ごろしております。それと、もう一つは、実際に支部長はじめ皆さん一生懸命やりながら、何か学校の現役あるいは学校当局との間が、上の方だけは通ずるが、あとは同志社新聞以外にはそれほど知る機会はないし、何かもう少し心の交流がないか、言い換えれば学生の現役との、たとえばクラブとのパイプがつながれば、もっと母校との時代的なハンディが縮まるんじゃないかということを書き立てて。私自身、幸か不幸か東京、大阪、いろんな面で旧交を暖めてますが、一日も忘れたことのない空手部ですら手紙をくれても不意ながら返事を出したことがない。しかし、なつかしい極みで、後輩諸氏の顔も見たい、道場も見たいと念じつつも、いま一歩寄りつけないということ、それから、学校、今出川へまいりまして、どこを訪ねるといふ、よりどころがないわけなんです。これは非常に寂しく思います。当時の姿と大分変わったせいもあるんでしょうが、何となしに学生会館でも昔のようにはいってもいいのかと迷いながら……せっかく京

都へ行き、そこまで足を延ばして門まで行って車を降りながら、どなたもおられるわけじゃないし、キャンパスを歩いて抜けて帰ってきただというふことで、何かさういったところで、クラブまで行かなくても、こういう所へ行けば、だれかがこうとかいうことがあれば、もっと学校へも、近くですし、チャンスがあれば寄りやすくなるだろうという気がする。これは私一人じゃないと思います。

秦 われわれとしても注意しなきゃいけない。いまおっしゃった、学校に来てもらって、どこへ行けば一般のことがわかるのか、できるならば友だち、昔の同級生くらいいるような、親しみのある人が応待できるよう。ことに女子大学なんかは結婚すると旦那を連れて新婚旅行のときに同志社へ来るんですね。私は時々、まあ共学の大学もさることながら、卒業生にいずれあなた方が帰って来られたら、休憩したり応接する所をつくり出すということを言うんですけど、おっしゃるとおりで、それは百周年の事業にしては小さいけれども、このさい考えるようにしたいですね。

林 決してぜいたく言うんじゃないくて、何

かよりどころが欲しい。ことにわれわれの時代と建物も様相を異にしましたんで、ちょっとあわてましてね。

大江 引続いて丹羽さんにひとつ、ビジネスをやってらっしゃる、そういった観点から、同志社の学生生活あるいは同志社の教育についてのお考えをお聞かせ願ったらと思います。

丹羽 私はやはりある学校をはずしまして、東京へ行こうか京都へ行こうかというところで、同志社の大学がキリスト教主義による精神教育をするんだということで、東京へ行けばろくなことせずに帰ってくるから、お前は京都へ行けということで、同志社の高商の方へまいったわけでございます。そこで、せっかくそういう学校へはいるならば、少しでもキリスト教が何であるかというようなことを、そこで学び得たならば大きなプラスではなかるかということで、キング寮へ入れていただいたわけでございます。そこは皆さんご承知のように、朝起きてから夜寝るまで、食事のときでも必ず何かお祈りをしなければいけない。もちろん禁酒禁煙でございます。私にとりましては長い学生生活の中で

は、同志社高商で学んだものが、現在もなお心のささえとして残っているわけでございます。しかし、大学の方へまいりましてからは、ちょうど戦争の盛期にはいり、それでも非常に少人数の法学部の法律科という方へ学んだわけですが、この先生とはいろいろ、もう兄弟のようなご指導やら、お世話もしていただきました。最近私の子供も同志社の大学を卒業さていただきまして、現在うちの会社におけるわけでございますが、その当時の話を子供にしましても、とても理解してくれません。(笑) そんなのはナンセンスじゃないかと。(笑) いまの先生というのは、とてもお父ちゃんの先生とは違うんだというようなことを如実に話してくれました。その後、松井さんたちと校友会の会にも時々邪魔してお話も聞くわけでございますが、どちらかといえば、まことに申し訳ないことかもしれません、高商出の方は樹徳会というものが非常に妙な感覚でつながっております、樹徳会の支部長もしばらくやらしていただきまして、何か同志社の卒業生というものは私たちの時代もそうであったかと思いますが、大会社へ就職され

る方と、自家営業で跡を継いで家業につかれる方と、二つの行き方が非常にはっきりしておりまして、樹徳会の会合なんかでも自分の母校に対する誇りといいますか、母校に対する願いというようなものが、非常に他の大学と比べますと、何か私どもが感じたところと変わった考え方が、最近特に激しく学校の方から来る何ものかによって出されているんじゃないだろうか。もちろんマスプロという教育の弊害であるには違いないですけれども、やはり、たくさん生徒で授業を受けております関係上、学校に対する愛着心というようなものが、非常に薄らいで現在つながれているように思います。そこで、私ども小さい企業で、従業員五百名ほどの企業でございますけれども、現在、学卒が百名程度でございますけれども、現在、私どもの企業が小さいということももちろん大きな原因でしようけれども、現在同志社の卒業生は私と子供と、それからあとほか二名ということで、私の出身校でありながら同志社の方が来てくれない。なぜかということで、子供を学校へ行かせ、お尋ねもしたんですけれども、やはり、いまの大学生、卒業生はまあ大企業中心といま

すか、先生方にお話ししても、昔の同志社といまの同志社とは違うんだ、昔の君たちが出た同志社は、やはり、学校というもののありがたさ、また、学校というものの場所というものもわきまえていたけれども、いまの卒業生はただただ就職の一つのステップに過ぎないんだと言えば、恐らくわかるだろうというような言葉でございまして、現在はもう学校の卒業生の就職についても、どなたに話すべきか、また、どんな所でそんな機会が持たしていただけるのかというようなことが、非常に少ないように思います。それから、私どもの友人関係は同志社希望者が非常に多いんです。それでよく私どものところへ同志社へ入りたいんだけど、どうなんだろうというような相談を受けます。そういう話にあずかりますと、私も出、子供も出ておきながら、何か現在、私自身としては、果たしてこの学校がお勧めできるかどうかということにつきましては、やはり、まあ、東京のある非常に少人数の大学というものの魅力といいますか、少人数グループで勉強された卒業生のご子息の話を聞きますと、非常にその学校のありがた味というものをいろいろ聞か

され、果たしてこれから同志社がいままでのような教育のあり方、もちろんキリスト教主義というようなことについてもそれに関係あると思いますけれども、百周年というような日をお迎えになるならば、何かここでもう一つ私学としての特異性というようなものを考えていただいて、進んでいっていただいたほうが、私も卒業生として誇りも感じ、喜びもこれからつなげていけるのではなからうかと思えます。

秦 なかなか意味のあるお話で……。ことにわれわれ、いままでおっしゃることはしょっちゅう気がついておりますけれども、皆さんの体験から聞きますと、ひしひしと胸を打つものがあります。いまおっしゃるように、百周年には、これを機会に、何とか古い時代のよさを、また同時に、同志社の誇りなり、同志社の義務なり、責任あるいは教育の根本的な方針を、やっぱり、反省して打ち出さんといかんじゃないかと思えますね。

大江 それでは次に前田さんにご感想なりご意見を。前田さんは特にスポーツ、ヨットで代表的な選手ですが、そういうこともひっくるめて、お話を願ったら……。

前田 最近世上ではやっておりますボーリングにしてもゴルフにしても、ゴルフで言いますと、ハンディ三〇というもののほどあいなものはないわけなんです。力が五〇あっても三〇、三一あっても三〇、本当の三〇であつても三〇、逆に裏を返して百年ということになりますと、九十八年というと百年にピンとこないわけなんです。百年、百一年というとはっきりそこで大きな転換が出てくるだろう。そういう時期に同志社がぶつかった。同時に、人生でもそうなんです。私、今度五十五歳なんです、普通からいくと定年なんです。その定年以後の問題が、人生には大きく響いてくると同時に、やっぱり学校も百年となつてきますと、これは二十年や三十年の急激なインスタン卜学校とはちよつと違つてきたわけで、自ら一歩ワクを変えて見られるだろう。もうその時期が知らず知らずの間に八十年くらいからやつてきておりますですね。その証査としては、私は大きな転換期が五十歳で来まして、どういうことをやるかといつたら、山の中へ行ってやる仕事をやつたわけなんです。はつとそこへ行ってみたら、長野県の山の中ですが、要人が同志社の

OBに数人おるということを聞いてびっくりしたわけ。二十年や三十年ではそういう所へ来ておらなかつただろう。私が卒業して名古屋へ帰つてきたのは昭和十六年ですが、当時同志社のOBというのは非常に少なかつた。ところが今日同志社のOBをかりに五〇％集めても恐らくはいる所がないだろう。そのくらい名古屋に卒業生がいるということは、これは何とかんとか理由はつきますけれども、キリスト教の關係がどうだとか、キリスト教の教育がどうだとかいうけれども、親や先生はともかくとして、はいる本人はそんなこと考えておらんと思うのです。ただはいり易いからはいらう、受かつたらはいらうということですね。しかし、四年なり六年なりおる間に、知らず知らずの間に何が同志社のカラーであるということがわからずに身についていることが、人によつては出てくるし人によつては出ない。私自身が反省して過去を振り返つてみて、どれが同志社のカラーだといわれてもわからない。ただ私の周囲にいる人が私をどう批判するかというと、同志社らしくない同志社人だと、こういう批判をする。それでいて、やはり同志社の人が周囲に

ぐっと集まるとするのは、何か知らないものを私が背負ってきたんじゃないかということを考える。私、こういう人間ですから、あんまり同志社、同志社ということは口にしないわけですが、知らない間にそういうことができた。

もう一つ卑近な例を話してみますと、私は二年目から運動の關係で下宿へ替わったわけですが、何と今日まで私の周囲は京都で名古屋町というくらいに、近所近辺、全部名古屋の人間が来て、いまだにそれが続いている。

下鴨下川原町四十三番地から五十番地まで同志社です。その下宿のおばさんが死んだときに、われわれは自分の子供までそこへ入れちゃってたわけですが、ばあさんが死んだときに運動關係もさることながら、下宿の周囲におって名古屋から来てるやつは集まれと言ったら二十五、六人集まった。みんな名古屋から出てきたというふうなふうで、そういうようなことから判断すると、私はいろんな問題を同志社で学校側としてもお考えになっておるんですが、これは全部つながってる問題だが、マスプロの教育もそうだろうし、精神問題もそうだろうし、先生と学生のつながり、

あるいは学校と学生のつながり、これはいくら理論をつけてみたって、何千人、何万人と出て、さっき丹羽さんも言われたように、われわれ法学部のときには大体四、五十人からせいぜいよう出たとして八十人、いやが応でも顔を知ってるが、いまはスピーカーで声を聞いたり、隣でやってるやつをこっちでテレビを見たりで、つながりのできる道理がない。まあ大きな社会の中にテンプレートにやってなかなかいかん。そうなると振り返ってみていくら昔でも八十人が全部知合い、つながっているかというところ、そうじゃない。一番長年つきあえるのは運動人——私の場合。その次は下宿が近かった人間ですね。こないだも山形から電話がありまして、死んだと思った人間が電話してきて、いま四国からこういう人間が来てる。いまこれで三人集めたとか、あるいは、ひとつ京都で三、四人集まって一緒にいるんじゃないかと——それが何と三十何年たった今日でございます。口でいくら言っても、やはり自然に自分の周囲に集まっているということ、知らず知らずのうちにきずなになっている。それはなぜかというところ、同志社というのは、百年の歴史を持

ってきた、経てきたということが非常に大きなもので、私は名古屋の周囲でいろいろ仕事をさしていただき、その後一身上の、ここにおれない仕事が多くなりましたので失礼していましたが、期せずして十月一日をもって、またこっちへ戻ってきたというようなことから考えてまいりますと、また、きょうここへお寄りして昔の顔を拝見して、いまお話を聞いてみると、みんなここへお集まりになっている方は、全部が十数名、多い人は五十名、百名という同志社人のつきあいを持っておられる。ここで、知った名前名簿を書けといえ、私はこれだけでも少なくとも三百人や四百人出てくると思うんですよ。それだけに、知らず知らずのうちにつながりがあるんだし、歴史もあるんだし、いいところあれば悪いところもあるが、とにかくそういうつながりが、今日できておるんで、今度松井さんが支部長になられて、いろいろお骨折りを願って、百年を一つのメドに、学校側は学校側としてご援助を願う、私どもは私どものつながりをつくるというんですが、これも言うに易し行なうは難しで、なかなかむずかしいですが、やはり、戦前の本当の少数教育をやれる

時代はちょっと無理だろうと思います。それが夢とすれば、外国ではおやりになってるらしいんですが、やはり、たくさんのお客様の中に、生活を一緒にする所というものを与えてやらなきゃいかん。そうなるをやっぱり私は寮生活だろうと思う。寮という古いようですが、学校の宿舎施設のたぐい。もう一つは、もっと簡易ですむのはやっぱりスポーツ人を養成してやる。これが非常にいい。ところが逆にいまのスポーツ界は残念なことには入学するときにはいろいろな手当があり、比較的學校でもある程度の援助を与えていただく。あるいはファミリー特典にしてもしかりである。ところが出るようになりますと親をこまかして出ますね、子供は。(笑)運動部にかこつけて落ちるのを当然に思ってる。私、こないだ、OB会へ行って、しゃべり上げてきたんですが、OBはだまされてるんだと。優勝したら二年でも三年でも当然留年するというが、そうじゃなくて、いまの学生は四年間たったもう正式選手として出れないという事になっておるにもかわらず、親、兄弟、知らない者をだまして、運動のために犠牲になると言う。これはうそだと。(笑)

學校の名譽を上げるといったって、卒業予定者が全部落ちて優勝したって、何にもならん。やっぱり「優」と「勝」とがなかったらいかんということ、いつも申上げているんですが、私どもヨットが三年連勝したとき驚くなかれ半分ずつ落ちておったんです。(笑)もう、そんな優勝ならしてもらわなくてもよいということをはっきり言った覚えがあるんですが、その一味の中に、何とか押出していただいたんですが、子供もおりまして、危うく留年するところをうまく出て来まして、いま会社におつて、それが結婚するというようなふうで、やはり、そういういろいろな手当をしておるんですが、必ず手落ちがありまして、すき間すき間をOBなり學校なり教授なり、あるいは同窓なりが、何か埋めていくというようなことが考えられないか。寮の完成、運動部への援助、あるいはゼミにしても……。私、いまのゼミは違つてと思うんです。ゼミは就職の手段だと。「お前さん、どこのだれのゼミだ」というと、「だれそれのゼミだ」と。「あの人は就職の率がいいからね」と。(笑)こんなばかげたゼミがある。これは教授もいかんと思う。おれの

ゼミへはいればよく売れるぞということを口にする教授さえある。そんなやつこそゼミからはねよと、ある教授に言ったことがあるんですが。大笑いをしておりました。

そんなことで、こどもも申し上げましたが百年というのは非常に同志社にとっては測らざる、測つてもできないところの大きなチャンスでございますし、皆さんがさきに申しましたように、ほつといても百年はあるんですが、なお一層この百年を意義づけるようなことをやっていただきたい。

大江 なかなかいいお話を伺いました。それでは安田さん、ひとつ……。

安田 私、二十九年に商学部を出まして、うちのおやじが印刷業であつた關係上ずっと十六、七年、それを継いで現在やっているわけです。先ほどからいろいろ、ご先輩からお話があつたように、同志社のカラーとかいふんなことには、率直に言つて同感なんです。何と言ふんですか、親切ですね。いまの前田さんの話によると、中には悪いやつもおるかもしれないと言われたんですが、そういう人は例外として、一般的に言つて非常に親切な人が多いということは私も非常に喜んでおりま

す。私、商売が印刷業で、いろんな会社関係とか役所とかにお邪魔をするんですが、私が同志社を出るといっただけで非常に親切にしていただけということが、現在の私にとっては非常に喜んでるわけです。日ごろ同志社を出たということに対して感謝しているわけです。それから、何といってもキリスト教主義というのが同志社の看板であるんですが、私自身同志社へは行って、キリスト教の話ももちろん聞きましたし、丹羽さんなんかのお話によると、寮へは行って非常にきびしくされたという話ですが、私の時代では二十五年から二十九年でしたから、そういうことは全然なくて、ただ宗教学という時間が一年生に必須であって、そのほかに水曜日にあっただけで、それも自由参加でよし、私どもの時代ではキリスト教主義の教育といっても看板だけであって、まあ、宗教学という時間は確かにあったんですが、どの程度キリスト教を理解して卒業したかということになると、非常に疑問な点が多いんじゃないか。私はキリスト教徒でもないんですが、高等学校はキリスト教関係の学校だったんですけれども、高等学校時代は非常にそういう関係でキリス

ト教の話もしょっちゅう聞きました。聞いたというより、いや応なしに聞かされちゃうから、それが頭にはいつてくるんですが、同志社ではそのいや応なしに聞かされるということが全然ないと思うんです。関心のある人が聞くことだから、卒業生にもキリスト教のキの字もさっぱりわからんという卒業生がたくさん出てくるのは、その辺じゃないかなと思うんです。だから、これだけの大きな看板が出る以上、もう少し何かの方法で徹底して、そういうキリスト教教育ということをやられたらどうかと、時々思うんです。まあ、宗教教育ということになるとむずかしい点も多々あり、いまのような時代では特にむずかしいと思うんですが、入学するときに、やはり条件として、そういうことをもう少し徹底されたらどうか……。

大江 そのところ非常にむずかしいところだけれど、大切なことだと思えますね。

秦 いまのキリスト教の看板というものと、いまの民主主義といえますか、ひどいものになると、それ以上の場合がたくさんありましてね。キリスト教に反対な思想、あるいは物質万能の思想、そういうものが横行してま

すからね。同志社の教育はまあ百年になってもなくなっても、これはやっていかなきゃならんんですけれども、非常にむずかしいんですね。ただ、丹羽さん時代にそういう教育ができたんですがね。あなたの時代には——私の息子も二十九年に経済を出てるんですが、私の家庭がキリスト教の家庭だもんですから、やっぱり日曜学校に行ったり、中学、高等学校もそういうものの感化があったもんですから、多少は違うんですけれども、しかし、同志社オンリーの教育からいうなら、キリスト教教育といえますか、宗教教育というか精神教育というものは非常に稀薄だったように思いますね。百周年の問題の中で何がむずかしいと言ったら、キリスト教主義を徹底さすとか、そういう教育を浸透さすにはどうするかという問題が非常にむずかしい。けれども、これはやはり国家のためにも国民のためにも、宗教オンリーを伝道するのではなくて、そういう精神的な教育というものを、同志社は責任を負うてやっていかなきゃならんように思いますね。それがために、女子大学でも瞑想室というのをつくりまして、そこで礼拝ができるようになってる。それから、女子

大の方では週に何回か礼拝をやってまして、中高ではご承知のとおり毎日、朝十五分ですけれども礼拝をやっています。大学はチャペルアワーを水曜日にやってる。ところがチャペルアワーの方はどちらかといえば宗教的なんですが集まる人間が少ない。それから、アッセンブリーアワーの方は名士を呼んでくる。しかもそれは少し新しい思想の持主の方には満員なんです。ところが実業家の巨頭を呼んできますと大して集まらない。小説家で新しいものと呼んできますと満員。こういう傾向ですね。

大江 それでは引き続いて坂田さん。大学でそういう教育を強制するということは非常にむずかしい問題がありますが、そういう問題もひっくるめて、同志社生活のご感想を。

坂田 結論を申し上げますと、同志社にご厄介になって、たいへんよかったと思ってるんです。同志社は私のときは予科三年で、これは充実しましたね。英語力というんですか会話力というんですか、私は英語研究会にはいってなかったんですが、外人の先生がおって一緒に神戸にメシを食べに行ったり、先生のところへ行行って、いろいろと冗談が言えるく

らい英語が上達したかどうか知らないけど、まあ、向こうは聞いてくれましたがね。それと全部原書でね。丸善で分厚い原書を買ってきて、全部は読まないですけど、一応読めると格好よろしいからね。(笑)格好いいだけではない、なかなか内容もよかったと思うんですよ。それで大分外国語力がついた。それと、やっぱり世間では同志社を出たという英語ができるだろうというようなことになるわけで、終戦後、外人が来たりすると、すぐ矢面に立たされるわけです。そのとき僕は自信がないが仕方がないからやっとなったわけです。あのとき安心したのは、私より英語のでの悪い人が進駐軍の通訳をやっておる。お、お前が通訳やってるなら、おれの方がましだ(笑)というような笑い話がありましてね。ということで、同志社を出て新聞社へはいりまして、新聞社は同志社は少ないんですが、阿部賢一さんという大先輩がおりました、あとはないんですよ。私ら先頭でラッセルしていくんで、辛いですね。あと、京大、東大、まして私のところは高石さん、奥村さん、慶応、いろいろな関の中に囲まれてどうしようもなく、続く同志はみんな気

の弱い方ばかりでね。新聞社は内外とも競争の激しいところですから、やはり人を踏みにじっていく方が上へ出るわけですね。同志社の者はそれができないわけです。人がいいというのか、おとなしいというのか、次長とかバイ・プレジデントとか、わき役しかできない。なかなかチーフになれないわけですね。なってやるという気もあるんでしょうが、決定打を欠くわけですね。野球でいうと打点がいらない。塁上走者をにぎわしてるんだけど、打点がないからいいとこで点がはいらない。そういう人が多い。それから、同志社マン、後輩がたくさんはいつてきまして、集まろうかという、なかなか集まりが悪いんですね。理事長を前に置いて申訳ありませんが、私のところもたくさんおるんで、やろうかと言うと、「また寄付だろう、集まると寄付出さんならんじゃないか。おれは遠慮する」と。寄付する会はごめんだということで。こないだも私の友だちの娘さんが卒業してから結婚しました。学生同士です。大阪のホテルへ私も招待されて行ったわけですが、カレッジソング歌おうかということになった。ところが、暗誦して歌ったのは僕一人

なんですよ。肝心の同志社のガールズ、ボーイズも知らない。みんな刷ったものが用意してあってそれを見て歌ってる。昔は応援団とかいろんな面でカレッジソングを強制されたというようなこともありましたが、いまの人はカレッジソング知らないですね。私が音頭をとって、ワン・ツー・スリー……でやりましたら、みんなびくりして、よく知ってますな……（笑）よう忘れんですな、と。そんなもの忘れられるかということですね。そんな一場面もありました。

まあ、学校へ行ってもしょうがないと先ほど言われましたですけど、せめて芳名録でも書いて置いておく所、芳名簿を繰ると、だれか来たら、これはまだだいじょうぶか、というようなものが欲しいですね。

秦 非常に感銘を受けました。総長室には芳名録、備えつけてあるんですがね……。

坂田 来賓のじゃなくて、われわれのですね。

秦 実のあるというのはそれですね。われわれも頭では覚えているんですが、やはり実行しないとだめですね……。

坂田 それと、理事長さん、学校のこと

ですけどね。私も年いってから、学校を出た証明書をもらうのに電話かけたんですが。あっちこっち振り回され、あんた旧制ですか。旧制とは何だ、旧制大学だ、というようなことで、多分庶務課で扱ったことがそうではないとか、そういう学校との関係を結ぶための案内が欲しいですね、電話でも何でも、よろずに答える一つのガイドですね。やっぱり長いことたつと機構がわかりませんからね。

最後に結論として、百年記念というのはなかなか大きな仕事ですよ。私も毎日新聞も百年で、ない知恵をしばってやっておりますが、なかなか名案というものは本当になかなかないですね。金かかる一方ですね。何でも金かけずに効果のあるものということですがね。それで、私が思うには、同志社時報、ざつと拝見してまいったんですが、「原点に帰れ」ということが書いてあったんですね、一応百年になって原点を再確認する。

私はチャペルでサボッてあまりろくろく聞いてなかったわけですが、新島さんの話だとかキリスト教の精神だとかいろんなものが、知らず知らずのうちに伝わっているように思うんですね。ことにヒューマニズムなん

かですね。それで、私も一つの良心になってやれと思ったこともあるんですよ。いまでも良心にもとらないように、会社の中でも何でも、人が見ていてもおらんでも、良心というもののはこうして働くんだと思ってやってますけどね。同志社の看板は何だ、三角が三つあって三菱商事のまがいかと云ってる人がありますけど、知育、体育、徳育よりも、原点に返って「一国の良心」、「良心を手腕に……」という金看板があるんですから、この金看板を原点に返って再確認する。外部の人が同志社へ来ても、ああ、同志社というのはこの精神だなということがわかるようなものを出す。政治機構が変わり経済機構が変わり、政府がいかに変わっても、同志社の原点の精神は依然として存在するというのが、僕はふさわしいと思いますね。これは金がかからんと思うんですね。そういうものだけでもいいと思う。

秦 そうですね。ちょうどいま毎日新聞社が編集しておられる大学シリーズ、関西では同志社が第一号で、写真集めたり取材して来月二十日ごろ出るだろうと思いますが、それも一つのPRであって、その中には明治、大

正、昭和時代の思い出、同志社のキリスト教精神、新島襄、私が将来のビジョンを書く。

まあ、どうもやはり学内にいるとマンネリズムになり、その日その日が忙しいでしょう。だからどうしても忘れがちなんです。やっぱり学校を出られた方が外部から同志社を批判する、教育を批判してもらって、実際の生活の中身をどうすべきだということを聞きますと、われわれもピンとききますがね。

平野 先ほどキリスト教主義についていろいろお話が出ましたが、私幼稚園は同志社系で、大学は四年のうち前の二年間は教育関係の学校におり、途中で編入したわけですが、その間先生を一年やった。教育は非常に必要だということをいまにして思うわけです。二年間だけ同志社におったということで、それじゃ、キリスト教精神は、と問われてみれば、まことにお恥かしい限りで、新島襄とか良心とかは、口にくそ言え、果たしてそれはどういうふうにして実行されているかについては、絶えず疑問を持っておったわけです。しかし、知らぬうちに自分として同志社を出てきたことで、何かがあるんだなという自覚とともに、弱さというものがあ

るんじゃないか、そういうことを感じておるわけです。そういう教育のあり方について、キリスト教という一つの教育をする場合は、先ほど安田さんのおっしゃったように教科というものを宗教学として徹底してやらせる、これも一つの方法かと思いますが、先きに理事長の話にもありましたように中には非常に反思想的な面もあるということですから、私のように全くキリスト教を知らん者でも、そういうものを得てきた、そういうような、人格を陶冶する場を形成する、そういう学校にする。これが一つの特色じゃないかと思う。

それから、希望として、海洋工学、宇宙工学、情報科学、最近はやりの未来学、あるいは医学部、こういう問題もやはり今後とも考えていただければと思います。産学共同と打算的になるわけじゃないんですが、やはり時代とともに、社会とともに生きる、その中に同志社マンとしてのよさを生かしていく……かねがね思っていることを申し上げました。

大江 キリスト教教育については、非常に実のある、しかも内容の深いご意見を伺い、ご批判もいただきましたが、百周年を迎え、前田さんからもお話がありましたように、新

しい同志社を建設しなくちゃならない、いままでの同志社のよさをさらに発展させなくちゃならない、そういう時点に来てると思います。将来の同志社、百年を迎えての同志社は、どういうふうな形を、校友として希望するかというようなことを……。

松井 同志社へはいるとき、新島先生の精神に共鳴してはいるというのは、もうほとんど影をひそめてしまって、一つの就職の手段としてはいつてくる。こういう状態が恐らく今後も続くんじゃないだろうか。これは世の中がそういうふうになりつつある以上やむを得ないと思います。百年を迎えるについて、ぜひひとつ学校でやっていただかと思えますことは、かねて懸案になっております新島襄の全集を刊行する。それを読むことによって、たとえ二万人のうちの一の二百名の方でも、それによって同志社の真髄を把握する。そして、そういう方々たちによってまた同志社のよさ、同志社の教育のよさというのが横へ広がる。私はそれでいいんじゃないかと思う。いまの若い人たちに強制したって決して言うことを聞いてくれるわけじゃありません。坂田さんがおっしゃった「原点にか

えれ」ということはそういうことじゃないかと考えるわけです。それで、将来の同志社は、教育においては原点に返った教育を取り入れるようにやっていくべきですが、強制すべきものではない。

林 私も同じようなことですね。立派な伝

統ある百年の新島精神というものを基盤にして、これからの新しい時代に受け入れられる実力を持った、本当の人間を送り出すような教育を受けさせてやって、出していただきたい。と同時に、すでに出了た、われわれOBに対しても、学校が身近に感ずるような何かシンボルを持つようになれば、それだけでもつながりが深くなるんじゃないか。よくアメリカなんかだと母校の校旗を自分のテーブルにつけてる。あるいは会社へ行っても灰皿にそのマークがはいっていると、何か身近な生活の中にも母校とのつながりを持つのも意義があるんじゃないかということを感じます。

丹羽 いまの経済環境の大変化と申しますか、流動的な様相をみておりますと、それに伴った、変わった新しい年がちょうど一九七五年に来るような気がいたしますので、い

ま、現在の考え方で四年先のことを考えるのは非常に私は困難だと思います。大学はやはり大学の本当の学習といえますか、卒業したらこんな人間がつくり得たんだというようなことを、もう一度教育方針に打ち立てられまして、同じ学校を出たんだなあという、何かそういうもの、本当のきずなになるようなものを、学校からも、また校友会からも、こここでつくり直していただきたい。こう思います。

前田 正直に言って、これはおこつていただいては困りますが、われわれにとって同志社は楽にはいれた学校で、今日、同志社は非常にむずかしい学校になってきたということがまず一つ。はいるのにむずかしい。出てからは知りませんが。(笑)それからもう一つ、カラーという問題について。いわゆる慶応カラー、早稲田カラー。特に名古屋という立地から考えまして、三十年前の名古屋から見た大学というのは、早稲田、慶応しか私立はなかったんですね。それで、京都へ行って、さあどこだろうというときに同志社が出てなかったんですが、今日は出てきますね。何でも三十年四十年前に東京の早稲田、慶応が有名

になったかという、むしろ立派な学校であり、創設者も同志社と同じように立派な人であつたけれども、実にたわいもないことには野球で有名になったんですね、早慶戦という……。一つの看板張ったわけで、私どもとしては学校に対しての愛着は、さっき皆さんの口から出たように、われわれ学校へ行こうと思つても、そういう場所がないが、それもあるように手配していただくと同時に、学校の先生も、何か事があるときでなく、会社内とかそういうグループにはいつてこられたらどうか。同志社のマークつけて来ていただいて「名古屋へ来たんだが、君んとこの会社はどうだ」と。たいへんなことでしょけれど、それが就職につながるんじゃないか。就職の時期に、「おれんとこの学校の人間とてくれんか」というと、もう、これは売込みになるんでございましてね。ちょうど北海道へ招待するのに、夏行ったら受けませんで、冬行ったら受けますんですね。冬行つてれば、あいつは本当に来てくれたんだと。だから、就職の時期とかそういう時期でないときにばんばんはいって来る。慶応も百年以上になつてOBが多いんですが、同志社とて

も、このごろ一大飛躍しまして、そういう点は私は鼻を高くしてるわけなんです。

先ほどの丹羽さんの言われたこと、自分もさることながら、やはり、いまの学校は、本当に勉強しに行くというのは何てったって官立大学だろうと思うんですね。東大とか京大、一ツ橋とか。これはいやが応でも詰込まれ、詰込まれなければ出て来れんというんだけれども、私立大学は多少ともそういうことが抜けてるような気がする。それを埋めるところというと、やはりヒューマンリレーションとか、比較的社会人に学生時代からぶつかって、頭なぐられしりをケツかれするスポーツじゃないか。スポーツ団体もOBがしっかりする。それとも一つは私自身が反省するのは、大きなOBというのは若いOBがやれない部分をカバーしていけばいいのでね、五十五になったり六十になってる人が、ヨットは、こうやって乗るんだと言ったって、ヨットの構造がもうすでに違ってますわ。帆が綿布であり絹糸であつたものが、いまはナイロンになってる。そんなこといちいち言ったって、お前乗ってみろったって乗れやしませんよ。そのつなぎをうまくつくる。

やはり、われわれは現在の小理屈を言う若い人はいかに、理屈を聞いてやると同時にうまく使うかということが必要だと思う。それに少なくとも、もう五十以上の人間は実物については口を出すな、力を使え……。それをやるにはこういう木がいるんだ、こういう場所があるんだということ、上のやつでないとできない。そういう意味合いから、運動々々というけれども、運動のOBが一生懸命やらなければいかん。

秦 アフターケアーの問題ですね。われわれも就職のときになって頭を下げるより、ふだん、「うちの卒業生はいかがでございましょう」と、同時にまた「注意すべきところがあったら、学校で十分注意いたします」ということを言わなきゃいかんですね。

坂田 私は、精神的なものは原点に返っていただく、それからもう一つは、同志社はインターナショナルな色彩があるので、アメリカと日本とこれからどうなるか知りませんが、アメリカだけでなしに、ヨーロッパとか東南アジアとか、いろんな国際色を持たせた学校というのが、一つのカラーになるんじゃないかと思うんです。そこで勉強する人、し

ない人、ありますが、それをサークルなんかで利用していく人には幸いなんです。国際色というのはひとつつくっていただきたいですね。

松井 結局、前田君の話じゃないけれども、最近の若い人は愛校心がないということ、を盛んに言いますけれども、学生だっけそうですね。愛校心というのは非常に稀薄になっているんですが、スポーツの対抗をやる場合に一番やっぱり愛校心というのが出てくるんですね。あ、おれは同志社の学生だと思えば、同志社と関大でやるとか、同志社と立命館とがしのぎを削るような場合、すばらしい愛校心を出すんだと思うんです。

坂田 昔は京大とのラグビーのとき、それから西京極の野球ね。

秦 愛校心がないわけじゃない。稀薄なんですよ。

松井 てれくさいような気がするんですね。

秦 さっき丹羽さんがおっしゃったように、教育の内容がないというようにおっしゃったこと、これは僕は至言で、やっぱり、われわれもそれは感じますね。われわれが勉強

をした時分には、まあ、よく頭に入れたと思うし、それからやはり鍛えられたように思いますね。いまのは一方交通なんですね。それこそラウドスピーカーで流すわけなんですね。反応を受け切琢磨磨するというところがない。ですからマスプロというか、そういうものの弊害、それはやっぱり本当の教育という場面で、人と人とのヒューマンリレーションを濃厚にするより方法はないと思うんですね。

丹羽 同志社大学はマスプロにすべきでなかったですね、いま考えますと。やっぱりこういう精神的なものを看板とした大学であるならば、まあ経営のことはわかりませんけれども、もう少し……。

林 僕らの時代には配属将校とけんかやったり、理事をつるし上げたりして、勝手なことやってましたが、いま理事長がおっしゃるように、その代わり勉強するときは勉強したし、また遊ぶときは徹底的に遊び、大学生活を有効に一つの考えを持ちながら送り、鍛えられもし、また先輩も鍛えてくれたわけですね。

秦 特に私たちのときなんかは週五日で土

曜日は休みでしょう。土曜日にはもう必ずポートをやるとか比叡山へ登るとか愛宕へ登るとか、テニス、相撲をやるとかしましたね。いまはどっちつかずで、それこそいろんなレジャーを楽しんでいるかもしれないけれど、も徹底しないですね。だから、いまおっしゃったようにスポーツを大切にする、スポーツから愛校心を起こす、こういうことは当然だと思ふけれども、やはりそれを再確認して、学校当局者がそういうところへ力を入れないといけないですね。

丹羽 勉強せずに運動だけを一生懸命やった人も実社会では数ありますね。

前田 だが、そういう人は内緒でやってます。ノートを借りたり、いろいろ聞きに行ったりしている。いまは何もやらない。昼はスケジュールを守り、夜は自分のスケジュールで遊んでる。そして目をはらかして翌日は出れん。いくら十代の人間でも夜昼かせいで……。

松井 いま、ちょっと名が出てるのはみんな留年ですね、はつきり言って。恥かしいとも思わんでしょうね。

大江 この辺でしめくくりの意味で理事長

にお話をいただきましたと思います。

秦 きょうは非常に実のある、体験を通じた、外部からのご批判を願ったりしまして、非常に収穫があったと思います。

私も百周年につきましては、目に見えないキリスト教の教育とか、あるいは精神教育というようなものがございますが、やはり目に見えるものでやらないかならない。というのは、田辺の方ですが、ご承知のとおり約三十万坪ほどございますが、これはとても今度の三年や五年で解決すべき問題じゃございませんけれども、やはりこれを中心にして将来の同志社、明日の同志社というものを考えていかなきゃならないと思います。田辺の校地はいますぐ大学がどうするというような問題じゃございませんが、とりあえず明治村をつくりました。新島先生が手を打たれた新島館、それからあの土地は縄文時代の住居跡が十三軒ほどある、それも保存する。それから継体天皇の行在所の跡がある。古墳も数カ所あります。何と言いますか、一つの博物館で、それからゼミナールハウス、宗教センター、総合グラウンドなどを考えております。そういうようなものはいずれ話題になるのだろ

うと思います。

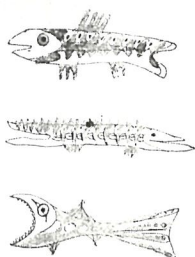
きょうは皆さんどうも貴重なお話をいただきましてありがとうございます。そのうちのできるだけのことは私ども実行に移していきたいと思います。

大江 もう一つ最後にご報告いたしておきたいのは、松井支部長さんから新島全集をつくれというお話がありましたが、これは九十周年の記念事業の一つの柱としてありますので、これは刊行させたい考えです。全六巻くらいになるんじゃないかと思いますが、ぜひやりたい。それから、一つは丹羽さんが触れられた同志社が昔に比べて二万人の学生になってマスプロ教育……は考え方としては立派なご意見だと思うんですが、半面、これだけの二万人の学生が出る、そういう大きな同志社をつくるのも、新しい時代に即した行き方じゃないかと思ってるわけです。というのは、丹羽さんやら前田さんやら松井さんがいらしたときの大学生というのは本当にエリートでして、名古屋でも同志社へ行ってらっしゃる人は何人もいなかった。ところが、このごろは四人に一人が大学生、そういう時代でありますので、いままでと通りの三百人から

千人足らずの大学であることがいいかということも、ちょっと問題があると思いますので、そういうこともひっくるめ、新しい同志社をつくることに努力いたしたいと思います。どうもありがとうございます。

【訂正】

本誌四十四号座談会記事のうち、二十四ページの写真で、岡部治子氏の写真と久永碧氏の写真が反対になっておりました。本欄をお借りして、両氏に深くおわび申し上げます。謹しんで訂正させていただきます。



同志社時報座談会

校友・同窓が語る「同志社100周年」への展望

第1回(東京)	出席者	田島弘一郎・津下満寿子・秦 孝治郎 原田 健・平山 健・クルト・ブラッシュ
第2回(京都)	出席者	山口 泰弘・秦 孝治郎・大宮 隆 入江 隆三・武間 富貴・岡 たみ 大津 ハル
第3回(九州)	出席者	上田 洸・古沢 基生・高木 勲 福田 利彦・吉田 法晴・熊谷 勲 岡部 治子・久永 碧

—— 第42号～第44号に掲載 ——